

【開催にあたって】

私たち患者の人権を擁護すること、あるいは擁護するための制度を求める活動を行う NPO は、自らの活動を社会正義と整合的なものであることを前提としてきた。しかしながら、昨今こうした認識を支えてきたと思われる人権、多様性の尊重、自由といったコンセプトの自明性は、失われつつあるのではないだろうか。

医療を受ける権利確保や公衆衛生政策の必要性から個々人の人権を抑制する手続き、人を対象とした研究の被験者保護、患者や障害者への偏見や差別などに対処すべく、これまで、個人の権利と自由を前提として整備されてきた筈の制度が、現実の諸局面においては、基本理念から乖離し、事態への適切な対応が難しくなっているように思える。

また、表現の自由をめぐる議論では、表現そのものが基本的に自由であるという前提よりも、日本国民が一定の情緒的等質性を共有しているという観念がなんら検証されることなく前提とされ、知識人たる人々がそうした前提にたった議論を行っている。いわば、社会の空気を読むことが尊ばれるという風潮は、多様な個人を主権者とする民主主義とは相当食い合わせが良くないとも言えるかもしれない。

しかし、一方で、身の回りの人たちは同じような考え方も持っているという感覚は、なんの確認や学習なくとも生じるものであり、理性的活動の歴史において獲得される人権よりもはるかに皮膚感覚としてなじみやすく、そうした感覚自体は、コミュニティを基礎とするという観点からは、否定できるものではないのかもしれない。だとすれば、私たちの正しさは、何によって支えられるのだろうか。

新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、こうした問題が日本固有のものではないことを顕在化させた。個人の自由はどこまで制限すべきなのか、トリアージの概念は、医療現場における治療の優先順位にまで敷衍されて良いのか、統計学の優位性を前提としたリスク・マネジメントをどこまで信用し実行すれば良いのか。

今回私たちは、講師として、社会学者の盛山和夫（せいやまかずお）さんと東北大学の大北全俊（おおきたたけとし）さんをお迎えし、盛山さんにはロールズ「正義論」の今日における射程や市民活動の課題などをご講演いただき、これを踏まえ大北さんのシモヌ・ヴェイユやイマヌエル・カントなどの議論を紹介しつつのコメントを交え、ウイズ・コロナ時代における、正しい選択のあり方や正しい統治のあり方について、当事者も含めたパネルディスカッションで議論を深めていきたい。

【表面の意匠について】

表のデザイン中、天秤をもつ腕は、正義の女神ユースティティアのそれですが、天秤の真ん中のデザインは、ウルトラセブンに登場するウルトラ警備隊のマークの真ん中をオリジナル意匠に変えてレインボーカラーにアレンジしたものです。子ども向け作品の正義の部隊にもかかわらず、正義の部隊として描ききることができなかった作品であったことから、今回のイベントのシンボルとしてみました。

ウルトラセブンは、1967年につくられた、円谷プロによる空想科学ドラマの第4弾でした。前作ウルトラマンが、怪獣 VS ウルトラマンという比較的単純な話であったのに対して、ウルトラセブンでは、宇宙からの侵略者 VS ウルトラ警備隊で話が進みますが、地球の先住民を人類の敵として滅ぼす話（ノンマルトの使者）や故障した宇宙都市を地球を守るために住民ごと地球防衛軍が吹き飛ばす話（ダークゾーン）など、子ども心にも後味の悪い回が結構あった訳です。その中で、宇宙から地球人を助けるためにやってきたウルトラセブン自身も迷い多きヒーローでした。最後にウルトラセブンがたどり着いた境地が、正義や地球のためにではなく身近な友を救う為にこそ自らの命を賭すことだったのも、ある意味象徴的かもしれません。